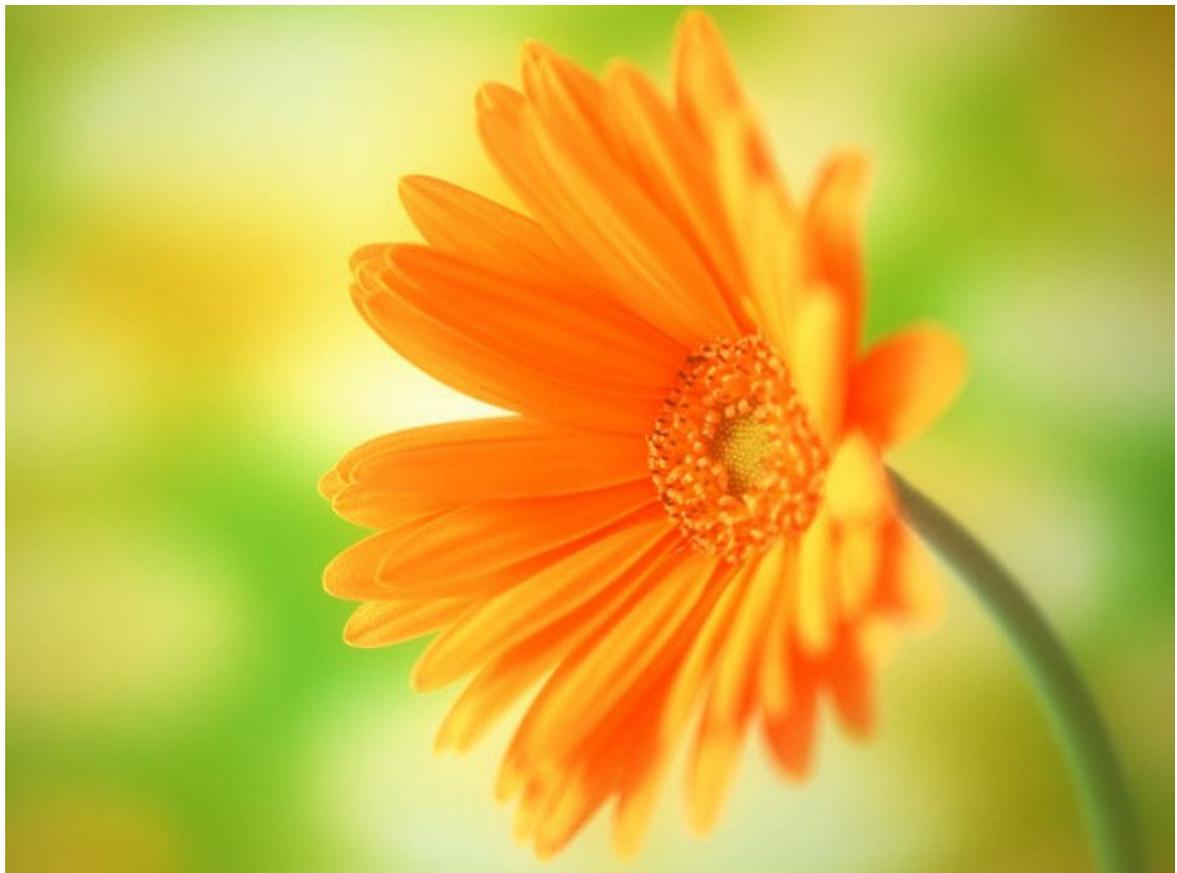


緩和ケアニュース

第21号

特集:緩和ケアにおけるチーム医療



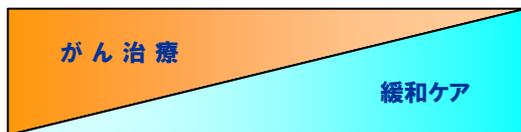
2010. 3月 発行
財)倉敷中央病院
緩和ケアチーム

近年、『緩和ケア』という言葉を目にする機会が増えた方も多いのではないのでしょうか。緩和ケアとは、病気に対して治療ができなくなった方への医療、あるいはいわゆる『末期』と思われる方もいるかもしれませんが。しかし、現在の緩和ケアはそのように考えられていません。また、緩和ケアは、がん治療で取り上げられることが多いですが、それ以外の病気でも同様の考え方がされています。

今回のニュースでは最近のがん医療における緩和ケアの考え方と、急性期病院であり、地域がん診療連携拠点病院でもある倉敷中央病院における緩和医療の取り組みについてご紹介します。

緩和ケアとは…

緩和ケアは、治療の初期の段階から既に始まっています。



抗がん剤治療を受けながら、苦痛を伴う症状のコントロールが出来れば、がんの治療に取り組む力がわいてきます。

痛みを取り除くだけではなく、がん治療を受けながら、がんになったことによる精神的な苦しみを理解し、一緒に対処法を考えることも、緩和ケアなのです。また、がんが進行し、治療が難しい場面でも、最後まで自分らしい生活ができるようにサポートを行います。

[参照;日本緩和医療学会 緩和ケア net.]

がん診療連携拠点病院の役割として、一般病棟でも緩和医療を行う必要があります。

がん患者様とその家族が可能な限り質の高い療養生活を送れるようにするため、治療の初期段階から積極的な治療と並行して身体症状の緩和や精神心理的な問題への援助を行うことが求められています。このような多様なニーズのすべてを1人の医療者が満たすことは難しいことから、専門性を生かした多職種チーム医療が不可欠とされています。

当院には、緩和ケアをより充実したものにするための緩和ケアチームがあります。院内すべてのスタッフと共に、患者様をサポートするために活動をしています。チーム構成は、医師・看護師・薬剤師・ソーシャルワーカー・リハビリ療法士・栄養士・歯科衛生士・訪問看護師と多職種にわたっています。

また、院内にとどまらず、ご自宅での治療を望む方をサポートするため、近隣の医師や看護師とも連携し、在宅医療を進める活動もしています。

最近の具体的な活動をご紹介します。

1) 職員教育の充実

専門的治療やケアは日々進歩し続けます。患者様によりよい医療を提供するために、最新の知識や技術を習得することは医療者にとって重要なことです。職員一人一人の努力に加え、院内での勉強会も行い、お互いに知識を高めています。その一例をご紹介します。

○ カンファレンス・病棟回診(週2回)

入院中、あるいは外来患者様で、痛みやそれ以外の苦痛が取りきれていない方を対象に、緩和ケアチームはその方に直接関わっているスタッフと検討会を行っています。実際の症例を通じて、多職種から専門性を活かした知識やアドバイスをいただくこと

で、よりよい医療を提供することを目標にしています。



カンファレンスの
一場面

○ 緩和ケア勉強会(月1回)

・事例検討

緩和ケアチームへの相談症例を、各職種の立場から患者様やご家族との関わりなど全人的ケア^{*}の視点で検討を行います。実際の経験や関わりを参加者全員で共有することで、今後の医療に活かすことを目標にした検討会です。

※全人的ケアとは・・・

身体的・精神的・心理社会的・スピリチュアル的な側面を統合してアプローチするケアです。

・ミニレクチャー

医学的な最新情報を共有するために、各職種からミニレクチャーを行っています。

例えば、薬剤師から「麻薬鎮痛薬の効果と作用」、歯科衛生士から「口腔ケアの実際」、看護師から「心身のリラックスのためのアロマセラピー」など、職種の特徴を活かして、実践に役立つ話を聞くことができます。

○ 緩和ケアセミナー(年2回)

緩和ケアを実践されている著明な先生方を院外から講師として迎え、院内外の医療者に対して公開講座を開催しています。「緩和ケア」の知識だけでなく、参加者の感性を豊かにすることにも役立っているセミナーです。



緩和ケアセミナーの
一場面

○ 緩和ケア研修会(PEACEプロジェクト)

PEACE プロジェクトとは、日本緩和医療学会が母体の医師に対する緩和ケア教育プログラムです。現在、すべてのがん診療に関わる医師は、研修等により緩和ケアについての基本的な知識を習得することが目標として掲げられています。また、「がん診療連携拠点病院」の役割として、医療者に対して知識習得の場を設ける必要があります。そのような背景から、昨年春、2日間に渡るPEACEプロジェクトを主催し、院内外の医師約30名が研修を修了しました。

このように、医療者の緩和医療に対する教育の場が広がっています。当院では、さらに多くの医療者とともに、知識向上に励んでいきます。

2) より専門知識を活かして

当院には、がん医療や緩和ケアに関する専門的な知識や技術を学んできた専門職がいます。医師では「がん治療認定医」、看護師では「がん専門看護師・がん性疼痛認定看護師・緩和ケア認定看護師」、薬剤師では「がん専門薬剤師」が緩和ケアチームの構成メンバーとして活躍しています。

このメンバーは、当院以外の施設で、数ヶ月あるいは数年といった研修を行っています。より広い視野で治療に取り組むことができるよう、他のスタッフと同様に日常業務を行いながら、アドバイザーとしての役割も担っています。

3) 地域連携でより質の高い療養を

緩和ケアにおける地域連携には、入院を視野に入れた病院への連絡調整と、自宅での療養を視野に入れた地域の医療者などへの連絡調整があります。

○ 医療施設でのより良い療養生活のために

医療施設にはさまざまな特徴を持った施

設があります。

最近よく耳にするようになった『緩和ケア病棟』は緩和ケアを目的に入院できる専門病棟です。ここは看取りだけを目的にはしておらず、身体的・精神的な痛みの緩和を行ない、できる限り自宅療養が送れるようにサポートする病棟です。

また、緩和ケア病棟ほど専門ではなくても、当院のようにがん治療を行いながら緩和ケアを行う急性期病院もあります。

患者様の経過によって、より良く過ごしていただく施設はさまざまです。

しかし、このような医療施設の情報は一般の方には分かりにくいものです。さらに、別の施設への入所希望があっても、これまでかかっている病院に対する遠慮や、施設への連絡方法や入所方法を知らないといったことがあります。

そのような悩みをお伺いするために、当院の地域医療センターでは他の医療機関の情報提供や転院の連絡調整を行っています。

○自宅療養を希望される方へ・・・

自宅療養を送りつつ緩和ケアを継続することもできます。患者様と病院という関係だけではなく、地域の先生や訪問看護、ケアマネージャーなど医療関係者がつながることで、最後まで自分らしい生活を送ることが可能になります。質の高い療養生活をサポートするため、地域でつながっていくことの大切さを感じています。

《がん相談支援室のご紹介》

『がん相談支援室』では、がんに関する不安や悩みなど、看護師やソーシャルワーカーがさまざまなご相談をお受けしています。

お気軽にご相談ください。

場所；外来棟2階 総合相談・地域医療センター
-がん相談支援室(医療福祉相談室)

連絡先； 086-422-5063



編集後記

緩和ケアチームを結成し、今年で8年を迎えます。緩和ケアにおけるチーム医療は、様々な職種が関わっていると前述しましたが、その中心は「医師」ではなく、「患者・家族」であると考えています。

患者様は医療者に対する遠慮や、よい患者でありたいとの思いなどから、病気に対する不安や恐怖心、医療に対する不満などを十分に話せないことがあるかと思います。患者・家族が医師や看護師に話せないことを、緩和ケアチームの多職種メンバーを活用していただき、苦痛や苦悩を共有しながら、患者中心の緩和ケアの提供を心がけたいと考えています。

遠慮せず、勇気を出して、尝试てみましょう「緩和ケアを受けたいです」と

*Orange Balloon project より



窓口

編集部では『緩和ケア』『在宅ホスピス』について、患者様、ご家族のご意見、ご要望、体験談などを募集しています。このレターに関するご意見、ご質問などもお寄せください。

発行元：(財) 倉敷中央病院

編集委員長

小笠原敬三 (院長)

編集委員(五十音順)

板谷紀子 (ソーシャルワーカー)

井上礼子 (看護師長)

里見史義 (作業療法士)

原田美雪 (緩和ケア認定看護師)

渡辺泰子 (がん専門薬剤師)